



Angelo

～アンジェロ～

KUN



rull.<

Angelo
～アンジェロ～

A n g e l o
〜
ア
ン
ジ
エ
ロ
〜
……
……
……
……
……
4

3月も終わりに近づき、東京でも日差しが暖かくなってきた頃――

オフィス街の中心にある公園では、暖かな日差しに誘われ大勢の人が集まってきた。

そんな和やかな風が流れる中、その男は一人ベンチに座っていた。

白髪交じりの髪を後ろへ流し、シックなスーツに身を包んでいる姿は、営業途中の体を休めているのだろうか……

しかし、男は随分長いことベンチに座っていた。この清々しい青空とは対照的に表情は暗く、目の前に流れる人の波など見えていないかのように虚ろな目をしている。

「はああ……」

小さな溜め息が漏れた。溜め息の中に混ざる悲しみ……

「高橋和紀が東京に出てきて三日になるが、高橋の悲しみを気にする者などこの東京には一人もいない。

世界有数の大都会でありながら無機質な街――

人はなぜそんな冷たい街を作ってしまったのだから……

大勢の人が集まる孤独の中で、高橋はただひたすら想い出の中を旅していた。まるで人生の幕引きを行っているかのよう、静かにゆつくりと……

こうして振り返ってみても「幸せな人生」だったと思う。とりわけ高橋の人生を満たしてくれたのは、25歳の時に知り合った白石百合のおかげだろう。二人は出会って直ぐに恋に落ち、僅か一ヶ月の交際期間で高橋は結婚を考えるようになった。その気持ちは日増しに大きくなり、数日後プロポーズをすることになる。「気の早い男だ」と思われるのは覚悟していたが、答えなどもらえなくとも「結婚する気持ちはある」ことを知っていて欲しいだけだった。しかし、百合は涙を溜め「ありがとう」の一言と小さな微笑みでプロポーズを受け入れてくれたのだった。その時の喜びは今でも忘れることができない。

結婚生活には色々なことがあった。平穩ばかりではなく辛いことも沢山あったが、高橋の愛は決して変わることはなく、百合の愛も変わることがなかった。それなのに……

一週間前。百合は逝ってしまった。高橋の半身がこの世からいなくなってしまったのだ。

——もう、なにも残っていない……このまま百合の元へ……

東京にきて三日、ずっとそのことばかり考えていた。辛いからと言って自ら命を絶てば百合が悲しむのはわかっている。百合の最後の瞳が「生きて頑張つて」と言っていた。一番よく知る百合だからこそ、高橋の考えなど手に取るようにわかっていたのだろう。百合を悲しませないためにも、もう一度頑張らなければならない。そう思い東京に出てきたはずだった。百合を忘れるためではない。もう一度、脚を踏みしめるにはあの土地は辛すぎる。百合との思い出が詰まったあの地では、前に進むことができないからこそ想い出の地を離れたというのに……

だが、喪失感は何処へ向かおうとなくなることはなく。むしろ土地を離れば離れるほど、心の穴が大きいことに気が付かされた。この喪失感は二度と埋まることはないだろう。

それならばやはり……

決して百合が許すはずがないとわかっているながら、その誘惑に負けそうになる自分を抑えることができなかった。

そして、なにもかも終わりにしようとして心に決めた時——

「おじさん。なにを泣いているの？」

不意に声を掛けられた。

驚いて顔を上げると視界が歪んでいる。知らずに涙を流していたらしい。涙を拭い顔を上げると、そこには心配そうに覗き込む一人の少女の顔があった。

年の頃は十六、七歳だろうか、今時の少女とは違い。おとなしそうな女の子だ。

「大丈夫？ なにか悲しいことがあったの？」

少女はなおも心配そうに高橋の顔を覗き込んできた。

その優しい言葉に、咄嗟に言葉が出てこない。そう言えば、東京に出て来て初めて声を掛けられた。親子ほど年が離れている少女が、何故高橋に声をかけてくれたのかわからないが、こうして心配して声をかけてくれる人がいることに、少しだけ心が暖かくなるのを感じた。

心優しい少女に応えようとするのだが、涙のせいで声が詰まり返すことができない。それでも、なんとか一言だけ絞り出した。

「……大丈夫だよ」

「本当に？」

高橋の返事を信じていないように、少女は表情を変えようとしない。その真剣な瞳が心から心配していることを物語っている。ただそれだけのことで高橋は少し嬉しくなった。

「ありがとう。本当に大丈夫だから……それよりも、こんな遅くにお嬢さんはなにをしているんだい。ご両親が心配しているだろうから、早くお帰りなさい」

時計は午後9時を指している。百合のことを考えていると時間の感覚が狂いにも見えなくなってしまう。今も周りが暗くなっているのに気付きもしなかった。

「私は大丈夫。それにまだ9時だよ。そんなに遅い時間じゃないから」

「そうか……9時は、まだ遅い時間じゃないのか……東京は田舎とは違うんだね」

「そうだよ。まだ遅い時間じゃないんだよ。おじさんは東京の人じゃないの？」

微笑を浮かべている少女は、なにを考えているのか高橋の隣に腰掛けた。そんな少女の行動に、戸惑いながらも高橋は会話を続ける。

「ああ……東京の人じゃないよ」

「そうなんだ。何処から来たの？ 東京にはなにをしに来たの？ お仕事で来たのかなあ」

高橋のようになくたびれたおじさんをなぜ気にしてくれるのかわからないが、久しぶりの会話に自然と言葉が紡ぎ出され応えていた。

「いや、仕事じゃないんだ」

「それじゃあ、遊びに来たの？ 東京はどうでしたか？ 楽しいところがいっぱいあったでしょ。あつ、人がいっぱいすぎて疲れちゃったのかな」

少女は高橋を気遣うように、あえて涙のことを問わず笑顔でそう聞いてくれた。

そんな少女の笑顔が美しかった。これ程、輝いていた時代が自分にはあったのだろうか？ 少女の美しい笑顔がまぶしすぎて、高橋の心を沈ませてしまう。

「旅行で来たんでもないんだ……一体なにしに来たんだろうな……」

再び涙が溢れ出した。死んだ百合のためにも、もう一度立ち上がろうと故郷を離れたはずなのに、一番が悲しむことを考えていた。しかし、生きる希望をなくした高橋は、闇の中を彷徨いつづけ抜け出すことができない。

「どうしたの……泣かないで……ゴメンナサイ。私変なこと聞いちゃったんだね」

少女は、戸惑いながらハンカチで涙を拭ってくれようとした。

「大丈夫だ。ありがとう……お嬢さんのせいじゃないんだよ。おじさん泣き虫だから昔のことを思い出すと涙が出てきちゃうんだ……おじさんにもお嬢さんみたいに輝いている時があったのかなあつて思つてね……でも、おじさんにはなかった。おじさんの輝きは消えてしまったから……」

この時初めて、百合と言う光の大きさに気付かされた。そして、自分は太陽に照らされて輝く月なのだと……光を当ててくれた百合がいたからこそ自分が存在できたのだ。それなのに、高橋を照らしてくれる光はもうなくなつてしまった。

「そんなことないよ。今の時代、年齢に関係なくいろんなことができるんだよ。お年寄りだつて輝ける時代になつてるんだから……あつ、若さは取り戻せないけど、私は若いから『光つてる』つて言うのは違ふと思うよ。だから、おじさんも大丈夫だよ。これからまだまだ輝くことができるんだから」

面白い少女だつた。今の若い子には珍しく自分の考えを持っている。少し古めかしい考えだが、幼い少女の顔がしつかりした女性の顔に見えるほどの強さを感じられる。

しかし……

「そうだね……でも、おじさんは疲れちゃつたんだよ。これから輝こうつて気力も——」

「なんで？ ダメだよ。頑張らなくっちゃ。頑張つていければいいことがいっぱいあるんだよ」

言葉を遮るように少女の声が飛んできた。いつたい少女に高橋のなかがわかると言いつたのだ。しかし、なにも知らない少女の言葉に、腹立たしさを感じなかった。ただ「頑張る」と言う言葉が一体なにを示しているのか、今の高橋にはわからなかった。

『頑張らなくっちゃ』か……頑張つてきたのにな……死に物狂いで頑張つてきた。それでも、神様には足らなかつたらしい。百合が生きていれば頑張れるさ、どんな辛いことでも百合の笑顔さえあれば……それまで奪つておいて、どう頑張

ればいいって言うんだ」

三度涙が頬をつたう。高橋は涙を拭おうともせず夜空を仰いだ。それはまるで天いる神へ訴えかけているように見える。「奥さんの為に頑張ってきたんだね。奥さんのこと愛してたんだ」

「ああ、病弱だったけどおじさんの全てだった。その百合がいなくなってしまう……頑張る意味がなくなってしまうんだよ」

何故、こんなことを話しているか高橋自身わからなかった。こんな少女に話しても仕方がないと言うのに……しかし、少女はまるで女神のように慈愛に満ちた笑顔を向け高橋を包み込もうとしていた。

「私みたいなのが言っても説得力がないかも知れないけど奥さんが羨ましい。こんなに愛されて……でも、今のおじさんを見たら悲しむと思うな、奥さんはおじさんに頑張つて欲しいんだよ。きつと天国で『今まで苦労掛けてゴメンナサイ』って言ってるよ。奥さんのことを思い出すのはステキなことだけど……そのことで悲しむのは、奥さんを悲しませることになると思う。奥さんは、きつとおじさんの笑顔を見ていたいんだから」

不思議なことを言う少女だ。百合が生きていたら同じことを言ったのではないだろうか、まるで天国にいる百合の言葉を少女が代弁してくれているような、そんな気にさせる言葉だった。

「ははは……不思議なお嬢さんだね。まるで、天国へ行っておじさんの奥さんに会って来たみたいだよ。きつと、百合もそう思っているに違いない。でも、おじさんみたいに年を取ると前を向くのには時間が掛かってしまうんだ。でも、ありがとう。お嬢さんに言われて少しだけ……ほんの少しだけ前を向けたような気がするよ」

「あはっ、笑った。おじさんの笑顔素敵だよ。そうそう、そうやって笑ってないと奥さん悲しむよ」

いつの間にか、薄い笑みがこぼれていた。まさか、こんな少女が高橋の心を僅かでも救ってくれるとは思ひもしなかつ

た。もう一度よく考えてみよう。せつかく少女がもう一度考える力を与えてくれたのだから……

そう決めた時、人の視線に気が付いた。こんなおじさんと少女が話しているのを変に思われたのだろう。確かに、他人から見れば不思議な組み合わせだ。

「ありがとう。おじさんは、もう大丈夫だからお嬢さんは早く帰りなさい。幾ら都会だからと言って、女の子が一人で歩いていたら危ない」

時計を見ると一時間程話していたらしい。もう都会でも遅い時間になっている。

こんなことを言って、少女の気分を害さないかと少し心配したが、少女は素直に高橋の言葉を聞いてくれた。

「おじさん。私のこと心配してくれるんだ」

「そりゃ、おじさんを心配してくれたお嬢さんだから、なにかあったら親御さんに申し訳ないし、おじさんも悲しいからね。だから、おじさんもお嬢さんのことは心配しているよ」

その言葉を聞いて少女は嬉しそうだった。そして、高橋の前に立ちもう一度微笑みを浮かべると……

「わかった。おじさんが心配するから、私帰るね。じゃあ『またね』。ばいばい」

そう言って少女は手を振りながら走って公園を出て行ってしまった。

本当に不思議な少女だった。何故こんなおじさんと話したがったのかわからないが、少女のおかげで留まることができた。もう一度考えてみよう。終わりにすることはいつでもできる。高橋は夜空を見上げ、そう考えるのだった。

*
*
*

翌日、陽が沈むと少女は高橋の前に現れた。

「こんばんは」

昨日と同じベンチに座っていた高橋の横に腰かけ、少女は昨日と同じ笑顔で微笑みかけてくる。まさか、本当に来るとは思っていなかったので驚きはしたが、高橋も笑顔で少女のことを迎え入れた。

「こんばんは……本当に来てくれたんだね」

別に待っていたわけではないが、来てくれたことが嬉しかった。

「そりや来るよ。『またね』って約束したじゃない。そうそう私ね——」

何故再び高橋の元へやって来たのだろうか。少女は屈託のない笑顔を高橋に向け、たわいもないことを一生懸命話し始めた。その話は本当にたわいのないことばかりだったが、その起伏のない緩やかな話の流れが今の高橋には丁度いい。それに、少女は高橋の気持ちを理解しているのか「頑張って」と言う言葉を使わないようにしているようだった。

少女とは思えない優しさが、高橋の悲しみを和らげてくれる。何故この少女に安らぎを感じるのだろうか……百合が死に、さりげない優しさに触れていなかったから、百合の面影を重ねているのかも知れない。

たわいのない話が続ぎ、時計の針が9時を過ぎると少女は立ち上がった。

「あつ、こんな時間だ。おじさんが心配するから、私帰るね」

「ああ、今日もありがとう。気を付けて帰るんだよ」

「ありがとう。またね。ばいばい」

そして少女は「またね」言い残し走っていった。

それから、少女は言葉通り毎日公園に訪れるようになり、高橋もいつの間にか少女を心待ちにするようになっていた。なにを話すわけでもない。少女がその日あったことを話しているだけの時間……

そんなたわいのない会話の端々から、少女には両親がいないのではないかと感じられた。そして、高橋はそのことを聞いてみると少女は気にした様子もなく「そうだよ。両親は昔からいないの。だから本当は、心配する人なんていないんだ。でも、おじさんが心配してくれるから夜遊びはしないでちゃんと帰ってるんだよ」と話してくれた。

これが、少女が高橋に話しかけてきた原因だったのかも知れない。孤独な少女は、父親のぬくもりを感じたかったのだらう。

「おじさんは、今日はなにをしていたの？ お仕事は？」

「いや……おじさんはダメなんだよ……」

高橋の言葉に少女は悲しそうな瞳を向ける。その真つ直ぐな瞳が高橋に思いがけないことを語らせた。何故そんな話を始めたのかわからない。こんな少女に話しても理解できないのはわかっているのに、高橋はゆつくりと語り出した

「おじさんにも昔娘がいたんだ。たった二週間だったけど可愛らしい娘が……あの時は本当に嬉しかった。この子の為ならなんでもできる。なんでもしてあげようと誓ったのに……おじさんはなにもしてやれなかった。この手で抱いてあげる。ことすらしてあげられなかったんだ。

悲しかったよ。まるで、奈落の底に落とされたんじゃないかと思うくらい……でも、百合の方がもっと悲しかったと思う。

それはそうだよ。命がけで産み落とした子が、自分よりも先に逝ってしまったんだから……病弱だったのに出産で無理をさせて、その上悲しい思いまでさせてしまった……それから百合は何度も発作を起こして病院に運ばれるようになった。その度に心の底から祈ったよ『百合まで連れて行かないでくれ』って……百合までいなくなったら、生きていけなくなっちゃうから。でも、おじさんが頑張っていれば百合は生きていけると信じていた。

だから仕事も一生懸命やった。休みがちになってしまったけど一生懸命……こう見えても、おじさんは会社に信用されていたんだよ。だから、会社を休むことが多くても、ちゃんとした役職まで就けてもらえたんだ。でもダメだった……世の中の子にしてみても仕方ないけど、これだけ不況が続くと、どうしてもおじさんみたいな人は辞めて貰わなくちゃ会社が成り立たなくなってしまうんだ。

社長も涙を流しておじさんに謝ってくれたよ『自分のふがいなさを許してくれ』って……今でも、社長には感謝している。こんなわがままなおじさんのことをギリギリまで勤めさせてくれたんだから……『私を怨んでくれ』と言われても感謝こそすれ、怨むことなんてできるわけがない。だから直ぐに仕事を見つけて社長にも安心して貰おうと思っただけだね。

百合には会社をクビになったことは言わなかった。その時も入院していたし、いらぬ心配をさせても仕方ないから……でも、結局仕事は見つからなかった。そんなことをしている間に、百合の体調が急変して処置を施した時にはもう……手遅れだった……

いつたいなにがいけなかったんだろうね。一生懸命仕事も探していたのに……百合のこともできる限りのことはした……それなのに、百合は逝ってしまった。おじさんの半身がなくなってしまったんだよ……そうしたら、家にいるのも辛くなつて……想い出の残る家にいると押しつぶされてしまうようで……それで、おじさんは逃げてきたんだ……想い出の

土地から……こんなこと話しても面白くないよな……悪かった……」

「そんなことない。辛いことがいっぱいあったんだね……でも、負けないで、負けないで頑張つて……前を向いて頑張つて欲しい……」

少女の目は真剣だった。その真剣な眼差しが痛くてたまらない。

しかし、こんな少女にでも高橋の悲しみを語ることができた。小さな人生を話すことで、高橋は最後の決心を付けたかったのかも知れない。

「もういいんだよ。おじさんは頑張ることに疲れてしまったんだ……なんのために頑張るのかもわからなくなってしまったんだよ……だからもう——」

「バカ！　なんでそんなこと言うの……おじさんはまだ頑張れるじゃない」

少女の怒鳴り声が夜空に響く。しかし、その声は涙で擦れており、頬には沢山の涙がこぼれ落ちていた。まるで、少女の心が涙になつて溢れているように美しい涙が……

「みんな応援してるんだよ。奥さんだつて……ううん、子供だつて応援してる。『お父さん頑張つて』つて、天国から大声で叫んでるよ。だから頑張らなきゃ、頑張つてみんなを安心させてあげなくちゃ」

少女は人目も憚らず大きな声で高橋をたしなめた。意外なほどの強い眼差しに翻弄されながらも、高橋は何故か嬉しかった。

「ははは、君みたいな若い子に説教されるとは思わなかったな……でも、なんだか嬉しいよ。うちの子も生きていれば、君くらいの年だからな……せめて子供が生きていれば頑張れたのかも知れない……いや、きっと頑張れただろうに」

少女の必死の訴えも、高橋の心を動かすことはできなかった。しかし——

「それじゃ、私の……私の為に頑張ってよ。私、お父さんもお母さんもないから、家族って知らないの……だから私のために頑張って！ おじさんは一人じゃないよ。私が応援する。だから、頑張って……諦めないで……」

少女の綺麗な涙が胸を熱くさせた。見ず知らずの少女が自分のことをこんなにも心配してくれている。会って数日しか経っていないと言うのに、高橋の凍てついた心に暖かな風を送ってくれている。この少女を泣かせるわけにはいかない。この少女が居ればもう一度がんばれるかも知れない。少女の暖かさが、人生を諦めていた高橋に、再び勇気を与えてくれるようにしていた。

「ありがとう……なんだか本当の娘に言われている気がしてきたよ。まるで『杏』が生まれ変わってきたみたいだ」

「『杏』ちゃん……って言うんだ。娘さんの名前……」

娘の名前『杏』と言う言葉が高橋の口から漏れた時、少女の泣き顔に微笑みが漏れた。

「ああ、丁度この季節に産まれたから『杏』。可愛らしい綺麗な杏の花のように育って欲しいと思って、二人で付けた名前なんだ」

「そっ、それじゃあ……あの……私を杏ちゃんだと思って、もう一度頑張って……私、一生懸命応援するから……だから……」

少女は再び涙を流しながら高橋を応援してくれた。その言葉があれば充分だった。

「ありがとう。本当にありがとう……なんだかもう一度、頑張れそうな気がしてきた……いや、頑張れる。君が応援してくれるなら頑張れる……もう一度、お嬢さんの為に頑張ってみるよ」

高橋の頬にも、涙がこぼれ落ちていた。こんなに清々しい思いになったのは久しぶりだ。明日が、楽しみになったのも……高橋は再び、太陽を見つけたのだ。少女が生きる希望を与えてくれた。

「頑張つて、お……おじさん……私、いっぱい応援するからね」
涙をいっぱい溜めながら笑っている顔が印象的だった。その天使のような笑顔は、高橋の奮起を喜ぶ、心の底から沸き上がる笑顔であった。

* * *

それから二人の奇妙な暮らしが始まった。一緒に暮らし始めたわけではないが、少女は必ず公園で出迎え一日の成果を聞いてきた。悪いことが多かったが、高橋は包み隠さず話した。

「そうか……でも、大丈夫だよ。こんなにおじさん頑張ってるんだもん。絶対にお仕事みつかるよ。だから頑張つてね」
少女のその言葉を聞くだけで頑張れた。先日まで「頑張る」意味さえ見つけられなかったと言うのに、今はその言葉が生きる希望を与えてくれる。

高橋は、いつしか少女のことを本当の娘のように可愛がるようになっていた。いや、本当に娘が生き返ってきたように思っていたのかも知れない。少女もそれを嬉しそうに受け入れてくれている。そして、高橋は少女に一つの提案をするのだった。

「いつもありがとう。おじさんがこんなに頑張れるのも君の御陰だよ……あの……一つ話があるんだけど……聞いてくれるかい」

「うん。なに？」

いざ言葉に出そうとすると、どう切り出しているのかわからない。それでも、高橋は少し照れながらも話し出すのだった。

「いや、ダメならダメとハッキリと断ってくれてもいいんだ……その……君さえ良ければ就職が決まってアパートを借りられたら……一緒に住んで欲しいんだ……凶々しいことはわかってる。でも、それを目標に頑張ってみたいんだ」

答えを聞くのが怖かった。見ず知らずの男が、一緒に住んでくれ等と頼むのは、高橋自身おかしなことだとわかっている。しかし、やましい気持ちがある訳じゃない。娘として接してくれた少女への素直な気持ちが溢れてしまったのだ。

「……………」

長い沈黙が高橋に絶望感をあたえようとしている。始めから答えなどわかっていた。このことを口にしたら二度と少女と会えないような気もしていたが、どうしても言わずにはいられなかった。まるで百合にプロポーズをした時のように黙っていることができなかったのだ。

そして、少女は瞳に涙を溜め、高橋に笑顔を向けると大きくうなずき小さな声で「ありがとう」と言ってくれた。

「ありがとう……嬉しいよ。私のために頑張ってくれるんだね……私幸せだよ。だから、頑張つて。頑張つて早く一緒に住もうね」

悲しみに満ちていた高橋の心に、久しぶりに灯った暖かい炎だった。少女が承諾してくれた。ただ、そのことが嬉しかった。これで、新たな目標ができた。これで、もっともっと頑張れる。

やはり自分は月なのだ。太陽があればいつでも輝くことができる。そして今、強い太陽が再び昇った。太陽が強ければ強いほど頑張ることができる。

翌日からは、より一層就職活動に力を入れた。ハローワークでは、仕事を見つけることは難しい。年齢がどうしても再就職の妨げになってしまう。だが、そんなことを障害にしまってはいけない。高橋は恥を忍んで、前職で取引のあった会社にも脚を運んでみようと思った。今までは、取引会社に面接に行ってしまったら、社長を責めているように避

けていたが、心の中で頭をさげると思い切つて電話を掛けたのだった。

そこは小さな町工場だったが、社長は直ぐに高橋と会つてくれ、それどころか心配までしてくれていた。

「高橋さん、一体何処にいらしてたんですか？ 三宅社長がずっとあなたのことを心配なさっていたんですよ。奥様が亡くなられて突然姿をくらましてしまつて、何故もつと早くに連絡してくださらなかったんですか？」

「申し訳ありません。どうしても三宅社長にはご迷惑を掛けられなくて……今日ここへ来るのも自分なりに考えました。でも、どうしても働きたいのです。なんでもやります。私を雇ってください」

高橋は、深々と頭をさげた。

「どうか頭を上げてください。当然私のところでは高橋さんのような方に来て頂いたらどんなに嬉しいか、こちらこそよろしく願います。三宅社長には、先程電話を入れておきました。社長も、本当にお喜びになりましたよ。近いうちにこちらに来るそうです」

人との繋がりがこれ程ありがたく思えたことはなかった。高橋の頑張つてきたことは無駄ではなかったのだ。百合を亡くした時、全てを失つたと思つたが決してそうではない。人の繋がりが再び高橋に希望を与えてくれている。

人生を諦めなくて良かった。全てあの少女の御陰だ。

高橋は急いで公園へ向かった。これ程心が弾んだのは何十年ぶりだろう。この気持ちを伝えたい人がいる。そう思うだけで足取りは軽くなった。

公園には、いつも通り少女が待っていた。屈託のない笑顔で高橋のことを……

「おかえりなさい。今日はどうだった？」

「仕事が決まつたよ。ありがとう、君のおかげだ。君のおかげで、頑張ることができた」

少女の手を握ると何度も頭を下げる。高橋の心からの感謝の気持ちだった。

「おめでとう。私はなにもしてないよ……おじさんが頑張ったからだよ」

少女も、まるで自分のことのように涙を流し就職を喜んでくれた。いや、高橋が立ち直ってくれたことを喜んでくれていたようだった。

「それからもう一つ。その社長が、アパートを借りるお金を貸してくれた。一緒に住もう……もう、アパートも借りてきたんだ。なにもないが今からでも住むことができる」

突然とのことに少女の瞳が戸惑っていた。いや、悲しんでいる……その瞳は、ついにこの日が来てしまったことを悲しんでいるような瞳だった。

「本当に約束を守ってくれたんだね。ありがとう……でも、一緒に住むことはできない。一緒に住めないの……」

少女は大粒の涙を流し、声を殺しながら泣いていた。

その言葉を聞いてショックだったが、涙を流し謝る少女を高橋は微笑みながら見つめ返す。

こうなることはわかっていた。見ず知らずの男と一緒に住めるはずがない。しかし、その目標があったからこそここで頑張れたのだ。

高橋は、いつまでも泣きやまない少女の肩に手を置くと優しく語りかけた。まるで父親のように優しく、なだめるように……

「いいんだよ。泣かないでくれ……無理なお願いをしたのは、おじさんだから……ありがとう。君の御陰で立ち直ることができた。君がいなかったらこんなに頑張れなかったよ。本当に、ありがとう」

「ゴメンナサイ……おじさん、いっぱい頑張ってくれたのに……」

「いいんだよ。おじさんは感謝しているんだ。これからもおじさんは頑張るから、今度食事にでも行こう。そのくらいさせてもらえないかな」

その言葉に、少女は再び泣き出してしまった。それが喜びの涙でないことは誰にでもわかる悲しい泣き声を上げて……
「ダメなの……もう……もう、会えないの……ゴメンナサイ……ゴメンナサイ……」

何故、会えないのかはわからないが、きつと理由があるのだろう。しかし、そのことを聞いてはいけない。それが、少女への感謝の気持ちになるはずだから……

本当に、この数週間は楽しい時間だった。少女との想い出を胸に、きつとこれから生きていくことができるだろう。悲しいが、受け入れなくてはいけない。これ以上少女を困らせることはしたくないから……

「そうか……わかった。わかったから泣かないでくれ……ありがとう。全て君のおかげだ。君のおかげで、こうやって立ち直ることができた。本当にありがとう……」

もう一度、深々とお辞儀をしてから、高橋はその場を立ち去ろうとした。

「待って……おじさんに私の名前教えてなかったよね……」

今までいくら名前を聞いても、教えてくれなかった。いつも楽しそうに「ダメだよ。私のことは本当の娘と思ってくれなくちゃ、だから私は『杏』なの。それに、これは誰にも言っちゃいけないんだけど、本当は私天使なんだよ。でも、見習い天使だからまだ名前はないの」と言っていた。高橋もそんな少女のことを百合が使わした天使だと思っていた。だからこそ、それ以上名前を尋ねなかったのだ。

その名前を教えてくれる。これが少女からの最後のプレゼントなのだろう。そして、少女なりの別れの挨拶に違いない。

「教えてくれるのかい……嬉しいよ。絶対に忘れない」

「うん。でも、おじさんは私の名前知ってるんだよ。ねえ……私の顔をよく見て……」

どうしたのだろう。そう言ううと少女は黙って高橋を見つめかえした。

「どうしたんだい……お嬢さんの顔になにかあるのかい」

「あるよ。私の顔に……ねえ、誰かに似ていない……おじさんの愛した誰かに……」

「えっ……」

その時初めて気が付いた。何故、今まで気が付かなかつたのだろう。高橋は少女の名前を知っている。忘れようにも忘
れられない名前……17年前に亡くした。娘の名前……春に咲く美しい『杏』の花のように可愛い娘になって欲しくて付け
た名前……

「まっ、まさか……そんなバカな……そんなことあり得ない……」

「よく見て！ 私のことをもっ……」

「そんな……百合……本当に杏……なのか……」

「そうだよ……私だよ。杏だよ……」

少女の顔には確かに百合の面影があった。その僅かな面影に知らず知らずのうちに安らぎを感じていたのだ。

「ゴメンナサイ……本当は言わないでお別れするつもりだったの……そう言う約束だったから……でも、我慢できなかつた。一生懸命我慢したけど……ダメだった。だって最初の時も、お別れできなかつたのに……今度はちゃんとお別れした
かったから……」

「……杏……本当に杏なのか……お父さんを助けに来てくれたのか……」

高橋は涙を流しながら娘に近づいていった。杏もまた涙を流し続けている。

「うん……お母さんがいなくなつて、悲しんでいるお父さんの姿を見ていられなくて……立ち直つて欲しくて……もう一度、頑張つて欲しくて……」

杏の瞳から大粒の涙がこぼれ落ちた。美しい涙が……

それが別れの時を示すように、杏の体が光包まれていく……そして、光は徐々に強くなり杏の体から輪郭を奪つていった。「さようなら……でも、今度はお別れできた。ちゃんと『さようなら』を言えた……」

「待つて……行かないでくれ！ 杏……お父さん、もつともつと頑張るから……お父さんを一人にしないでくれ……杏……」

高橋は、薄れていく娘の躰を力一杯抱きしめた。何処へも逃がすまい。絶対に離すまい。むなしい抵抗だとわかつていながらも、抱きしめることしかできなかった。17年間抱きしめられなかった時間を取り戻すかのように……

「お父さん……ありがとう……やっとお父さんに抱きしめられた……ずっとこうしていたい……いつまでも、お父さんの子でいたい」

「杏……行くな……行かないでくれ」

「ゴメンナサイ……でも、泣かないで……杏は、お父さんとお母さんの子で幸せだったの……お父さんといた時間……楽しかったよ……」

「ダメだ……杏……行っちゃダメだ」

しかし、光は杏の体を包み込むと弾けて散った。

「杏……杏……」

弾けた光がまるで蛍のように高橋の周りを漂っている。それは、父との別れを惜しんでいるように輝きを失わなかった。

「さようなら……杏はいつもお父さんの側にいるよ。お母さんと一緒に……だから、これからも頑張つてね……お父さん」
その言葉を最後にゆっくり光を失つていく……

「杏……」

最後の一粒を両手で包むと、光は高橋に抱かれたことを喜ぶように、一度強く輝くとゆっくり消えていった。

「……………杏……………」

泣き崩れる高橋の頬を一陣の風が通り抜けた……その風は花びらを舞い上がらせ、高橋を体を包んでいく。
その白く美しい杏の花びらは、月明かりに照らされまるで高橋を励ましているように見えるのだった。

『Angelo ～アンジェロ～』 終わり

Angelo ～アンジェロ～

KUN



制作日：2011-06-01

制作コード：NKUN-000-20110620-AN001

価格：0円（税抜き）

制作元：Akny

HP：

<http://null.2-d.jp/>